

若者 先人の技に息吹

崇城大芸術学部デザイン学科 熊本市西区は、全国の大学でも珍しい活版印刷の技術を伝えている。鉛活字は、閉店した印刷所と印書店からの高層、ついでに鉛字が、若者の手で息を吹き返そうとしている。

崇城大芸術学部「活版印刷」授業



伝授 崇城大芸術学部デザイン学科の学生たちに鉛活字の組み方などを教える「佐藤活版所」元店主の佐藤利吉さん(左)＝6月29日、熊本市西区の同大

7月下旬、学生たちは自ら考えたリリースを基に、組版から印刷までの課題を取り組んでいた。棚にびっしりと並ぶ鉛字を自ら選り取り探して、大きな異なる文字をバランス良く配置しつづける作業に悪戦苦闘。2年の千々波香蓮さん(20)は「デジタル全盛の、なかなか体験できない作業。手作りの印刷に親

しみが湧くし、レトロな感じがして」と興味津々の様子だ。指導する森野昂人教授(59)と甲野善一(郎准教授48)は「活版印刷の授業を行うのは、西日本では崇城大だけだろう」という。印刷の原理や、文字や文章を読みやすく、美しく配置する「タイポグラフィ」というデザインの基礎を学ぶことを目的に、2年前から取り組んでいる。森野教授はパソコンやスマホで簡単に文字を入力できる時代、先人の技術に触れることで、文字や印刷物への関心が高まることを話す。

「教え切れないほどの鉛字は、全国に散れる貴重な財産」と甲野准教授。その全てが佐藤活版所(山都町)とヒロタ印刷(熊本市中央区)からの寄贈だ。両店は百年以上の歴史を持つ老舗だった。高齢化などで佐藤版所は2019年、ヒロタ印章は21年に店を閉じたものの、眠っている道具を再び使ってほしいと願っていた。

「印刷で活字が抜け落ちないように、余白部分を金具で隙間なく埋めてください」。6月下旬、佐藤活版所「元店主の佐藤利吉さん(88)」が家族4人が、約2時間熱心に学生たちに「を伝授した。

「素手は思えない」「実際の良さに驚いた」と佐藤さん。一塵れつある活版印刷の文化を、若人たちに知ってもらえてうれしい。私が用いた鉛活字を喜んでいるのでしょこと、新たな文化の担い手」に目を細めた。(小野泰明)

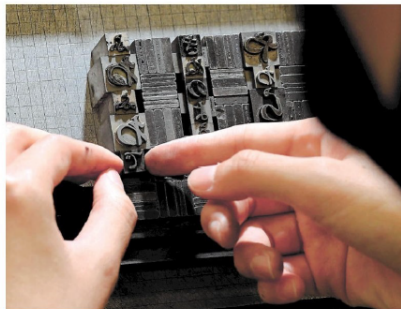


財産

鉛活字がびっしりと棚に並ぶ教室。森野昂人教授は「鉛活字の数は分からないが、1つ1つが貴重な財産」と話す。7月6日

真剣

真剣なままとして鉛活字を補修する7月6日



指先

学生の指先で組まれていく鉛活字。文字の配置や余白部分の埋め方など、工夫が求められる＝7月6日



笑顔

思い思いのリリースを、手作業で紙印刷した学生たち。満足げの仕上がり笑顔がこぼれる＝6月22日